

氏名	大河原 健次郎		
学位の種類	医学博士		
学位授与番号	乙 第 1 5 号		
学位授与の日付	昭和37年 6 月 6 日		
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 (学位規則第 5 条第 2 項該当)		
学位論文題目	骨髓組織培養法による骨髓巨核球に関する研究		
論文審査委員	教授 平 木 潔	教授 小 坂 淳 夫	教授 妹尾左知丸

#### 学 位 論 文 内 容 要 旨

私は人並びに海猿骨髓の体外組織培養を行い、骨髓巨核球の培養経過、栓球分離機転並びに退行性変化について、種々なる培養条件のもとで、位相差顕微鏡を用いて観察し、次の成績を得た。巨核球で培地中にて機能を営みうる期間は、人の場合で高々90時間まで、海猿では48時間までであり、触手状突起形成は、巨核球の運動の最も活潑な時期にのみ見られ、その突起先端より栓球を分離する事を確認した。同一培養条件下においても、巨核球は種々異った退行性変化を示し、胞体の変性像を14型に、又核の変性像を10型に夫々分類した。従来骨髓塗抹染色標本において、いわゆる血小板野形成ないしは栓球分離像なるものをもって、栓球生成機転であると主張して来た諸家の説には賛成し難く、これは巨核球の退行性変化乃至は人工的産物に基くものと考えらる。巨核球の至適培地温度は 38°C 前後であり、又至適培地 PH は、人では 7.63—7.92 であり、海猿では 7.75—8.07 であつた。培地滲透圧では、巨核球の退行性変化は等張より遠ざかるに従つて速かに出現する傾向があり、高張程その傾向が強かつた。

(本論文の要旨は昭和33年 3 月28日第 1 回アシア国際血液学会において発表した。)

(昭和34年 8 月発行 岡山医学会雑誌 第71巻 9 の 1 号に掲載)

## 論文審査の結果の要旨

大河原健次郎提出の「骨髓組織培養法による 骨髓巨核球に関する研究」に関する 学位論文につき審査した結果の要旨は次の通りである。

著者は人並びに海猿骨髓の体外組織培養を行い、骨髓巨核球の培養経過、栓球分離機転並びに退行性変化について、種々なる培養条件のもとで、位相差顕微鏡を用いて観察し、次の成績を得ている。巨核球が培地中にて機能を営みうる期間は、人の場合で高々90時間まで、海猿では48時間までであり、触手状突起形成は、巨核球の運動の最も活潑な時期にのみ見られ、その突起先端より栓球を分離する事を確認している。

次に同一培養条件下においても、巨核球は種々異った退行性変化を示し、著者は胞体の変性像を14型に、又核の変性像を10型に夫々分類している。更に従来骨髓塗抹染色標本において、いわゆる血小板野形成ないしは栓球分離像なるものをもって、栓球生成機転であると主張して来た諸家の説を批判し、これは巨核球の退行性変化乃至は人工的産物に基くものであると考えている。尚巨核球の至適培地温度は38°C 前後であり、又至適培地 PH は、人では7.63~7.92であり、海猿では7.75~8.07 である事を認めている。又培地滲透圧では、巨核球の退行性変化は等張より遠ざかるに従って速かに出現する傾向があり、高張程その傾向が強い事を認めている。

以上の通り本論文は新しい知見に富み、学術上有益であり、著者は医学博士の学位を授与せられるべき学力を有すると認める。